自分らしく生きることの大切さ

社会福祉学部社会福祉学科２年　中野　梢
活動先：NPO 法人　to ピア
クラス：岡　多枝子　先生

サービスラーニングの定義

私がこの１年間で考えたサービスラーニングの定義は､活動前に自分なりの仮説を立て、活動によって立証していく。その後リフレクションをして問題提起をする。また、活動先に対して提言をして、その提言内容が実現できるかどうかを議論していくことだ。リフレクションのもともとの意味は「反射」である。反射させる対象物がなければ、リフレクションは成立しない。この対象物こそが活動前の仮説である。活動内容や目標は仮説ではなく、立証するための手段にすぎない。サービスラーニングを行う上で、最も重要なことは仮説だと私は考える。

活動前の仮説

事前訪問時に、私は利用者の様子について職員から「コミュニケーションをとることが苦手だ」ということを聞いた。このことから利用者はコミュニケーションがとれないという面から、社会的に排除されてしまっているのではないかと私は考えた。この社会で生きていくとなると、誰とも関わらない状況をつくることは困難なことである。例えば「友達と話す」「先生と議論をする」という場面はもちろんのこと、「買い物でレジの人に「袋はいりますか？」という質問に答える」という場面も人と関わっている。一見、誰とも関わっていないような所でも、それは意識していないだけであって関わっているのである。このように考えると、コミュニケーションがとれないことで生きづらさを感じ、また障害があるという点も含め、世間の偏見により排除されやすいのではないか。

活動内容

自分らしく、地域や社会で役割を持ちたいという意識をもった利用者がいることから、東日本大震災の被災者へのメッセージカード作りを行った。間接的ではあるが、どのような言葉をかけようか、災害について考えることも地域や社会への貢献活動につながるのではないかと考えたので提案した。利用者は不器用ながらも、それぞれが一生懸命言葉を考え、カードを作り上げてくれた。このメッセージカードは、本学のボランティアセンターを通して被災地へ送る。

リフレクション

利用者の様子から気づいたことは、何をするかが分かっている仕事は手際よくこなしていたが、臨機応変に動かなければならない時は行動が鈍くなる。このことからコミュニケーションをとることが苦手というよりも、利用者が自分自身の判断力・決断力に自信がもてないことが、to ピアから巣立てない根本的な理由ではないかと考えた。

私が活動中に気をつけたことは、利用者それぞれのペースを崩すことのないように関わ

っていくことだった。利用者は介入しすぎることを望んでいないと考えたからだ。反省点として、利用者同士で会話できるように私や職員の利用者との距離感を考えていくべきだったという点である。

人間にとっての自律とは～自分らしく生きることの意味～

自律とは「外部からの支配や制御から脱して、自身の立てた規範に従って行動すること」（広辞苑第六版）とされている。これを軸に考えると抑圧された環境では難しい。チャールトンは「障害をもつ人たちが権力や自分たち自身の無力に立ち向かい、闘おうとしなかった最大の理由は劣等感である。」(『私たちぬきで私たちのことは何も決めるな　障害をもつ人に対する抑圧とエンパワメント』2003,p.139）と述べる。つまり自律しようとするためには抑圧状態から脱しなければならないが、その抑圧によって出てくる劣等感が自律できないようにさせているということだ。そこで支援する側に求められることは、その人が自分らしく生きられるような環境づくりだと考える。支援する側は決して自分たちの考えを押し付けてはいけない。しかし私は障害の有無は関係なく、自律しようともがいている人はいると思う。自律は最終的には本人の行動次第で形成される。自律しようともがく人に対しての支援は、決して寄り添うことだけはない。to ピアの職員の意見からこのように考えた。

ではなぜ自分らしさは大切なのか。自分らしく生きる意味とは何か。世の中の人の中には流行や、有名人の影響で自分にも反映させる人もいるだろう。しかし、それは社会の流れに左右されているだけであって、自分で決めたわけではない。ただし、仮に相手の意見を聞いて自分の中でしっかり考えた上で反映させるのであれば、それは流されたとは言わない。誰の意見も聞き入れず、自分だけの意見をもつことだけを自分らしさということではないと私は考える。人間は一人では生きられない。もしもそれができたとしたら、コミュニケーションをとる必要性がなくなる。また、他人の意見を聞かないということは、それだけ自分の視野を狭くするということである。自分の軸をしっかりつくり、相手の意見も取り入れながら枝を広げていくことが、自分らしく生きることだと私は思う。このように考えるので自分らしさを大切にしたい。しかし、これはあくまで私の思いであり、「なぜ自分らしさは大切なのか」という問いの答えにはまだたどり着いていない。この 1 年間で考えてきたことを基盤として、今後の私の課題としてこれからも追求していこうと思う。

まとめ

サービスラーニングを通して、観察力が身についたのではないかと思う。この活動はただ体を動かすだけでは学びにはつながらない。活動先の利用者や職員がどのような人たちなのか、活動先の雰囲気などを自分なりにつかめなければならない。それができるからこそ次につなげられる。私は自分の目で見て、自分の耳で職員や利用者から話を聞くことで、to ピアと少し距離を縮めることができたのでないかと思う。また、自分が頑張れば頑張るほど、利用者はそれに応えてくれると感じた。むしろ利用者が応えてくれるから私は 6 日間頑張ることができたことに気がついた。私の活動は個人的活動に見えるが、多くの人に支えてもらったからこそ充実した活動になった。職員や利用者をはじめ、サービスラーニング関係者の方々に感謝申し上げたい。

地域活動や社会活動に目を向けることが不十分だったということが今回の活動での反省点の 1 つだ。そのため狭い視野の中で見えてきたものを述べる。to ピアでは NPO 法人菜の花との交流がある。私が活動中の時には大きな行事はなかったが、普段菜の花の利用者の食事を作っていることや、休み時間に囲碁をやるなどの小さな関わりが時々見られた。to ピアの利用者を受け入れる先は To ピアだけではない。菜の花を利用されている高齢者の方も受け入れている。様々な人との関わりがあることで利用者は少しずつ変わっていく。自分から菜の花の高齢者の方の所に行って囲碁を打っていた利用者を見て、「視野を広げていくことはこういうことかもしれない」と考えた。社会は時には排除するものであるが、同時に自分の居場所を探すためのものにもみえる。しかし、それはその人という存在を認めてくれる誰かがいるからこそである。to ピアと菜の花はお互いを認め合っているからこそ関係が保たれていると考えた。このような関係は他にもあるのではないだろうか。私はこれからも to ピアと関わろうと思っている。その中で地域との関わりにもっと目を向けていきたいと思う。

《参考文献》

『私たちぬきで私たちのことは何も決めるな　障害をもつ人に対する抑圧とエンパワメント』
著者：ジェームズ・I・チャールトン　監訳：岡部　史信
明石書店　2003 年 10/20　初版第 1 刷発行